2010 年度 あうるすぽっとインターン修了生 レポート集

2010 年インターン修了生　６名
青野華生子、福本悠美、岩瀬恵美、嶋田敬介、岡島裕紀、寺村千絵
研修期間　2010 年５月 23 日(日)～2011 年２月 28 日(月)

自分で考えて動く

青野　華生子

九か月の研修では、演劇、地域創造、公共（劇場）などについて今まで知らなかった知識を多く学ぶことができた。でも、そうした外から知識を得るという意味の学び以上に、自分自身で考えて動くという経験が一番の勉強であったと思う。たとえば、ワークショップやプロデュース公演の折込チラシをする公演先をいろいろな角度から見て考えたり、ウェブ宣伝する際の宣伝文を考えたり、会場の受付準備では何が必要なのかを考えたり、公演に携わっている人やワークショップ参加者などが何を求めているかを考えたり、自主的な思考をするようなことが多かった。もちろん、今回の研修では個人で動くことよりも、研修生六人のチームで動くことが大切であり、六人で考え、議論し、意見を一つにしていくという作業を頻繁に行った。それこそがとても面白かったと思う。一人で考えているよりも多くのアイデアが得られるし、言葉に出していくうちに自分の想いが固まってビジョンが明確になっていき、チームで働く意義を強く感じた。また、シフトを自分たちで組み、まわしていくというシステムを与えられたことがとても良かったと思う。誰かが穴を空けたら、誰かが穴を埋めて、自分たちの中で問題を解決するという基礎ができていった。個人的に、大学の卒業製作や卒業論文、内定先の会社のインターンなどで研修期間後半に穴を空けがちだったため、そこを支えてくれた残りの研修生にとても感謝している。さらに、この後半期間は、自分はあまり動けないため誰かに代わりに動いてもらったり、仕事の引継ぎをしたり、間接的に仕事を遂行しなければいけない場合も多くなって、その指示の出し方、説明の仕方に難しさを覚えるとともに勉強になったと思っている。

私がこれからも演劇の世界で生きていく上で、あうるすぽっとの事業を通して演劇人の方々と知り合えたことはとても為になったと思う。演劇が人と人が出会うものであるから、この道では人脈やコミュニケーションが大切なのだとよく説かれるが、その初めの一歩として、このあうるすぽっとでの経験が役立っていく気がする。また、演劇人以外にも、ワークショップ参加者たちとの出会いで、演劇が人に与える力のようなものを目の当たりする経験が沢山でき、私にとってかけがえのないものになった。

（あおのかなこ／早稲田大学四年在学中）

楽しくもあり、苦しくもあり

福本　悠美

九か月という長期のアートマネジメント研修も、残すところ一か月を切ろうとしている。あうるすぽっとにおいて、研修生として過ごした時間はめまぐるしく過ぎ、もう終わりを向えようとしているなど信じがたい。多岐にわたるエデュケーションプログラムや自主演劇事業に、同時進行的に従事したためだろうか。

たくさんあった事業のなかでも、一番印象的だったのは、自主演劇事業の「長短調　または眺め身近め」だ。私たちの研修が始まって間もないころから、中期にわたって行われた事業である。オーディション段階から同席し、力及ばぬまでも研修生一丸となり、稽古・公演に尽力したつもりだ。そこでは、今まで見ることのできなかった「演劇公演を生みだす瞬間」を体感し、マニュアルのない世界でどのように考え、動くべきかを考える経験をした。

また、演劇公演に携わるたくさんの方と触れあう機会を得、様々な立場からの意見をうかがうことができたのは本当に恵まれた体験だった。

研修生のうちでは、集客を増やすにはどうしたらいいのか、稽古がしやすい空間をいかに提供することが出来るのか、キャスト・演出に分かりやすく情報を伝達するにはどうしたらいいのかなど、その時に気になった事項について話し合った。

教えられたことをただこなすのではなく、今後どのように事態が進展するだろうかということを考えるように心がけた。こうして、どんどん積み重なっていく業務に従事することは、楽しくもあり、また苦しいことでもあった。新しい世界にふれている瞬間は単純に喜びを覚え、憧れていた世界に携われることは楽しさで満ち溢れていたが、狭い世界で出来るつもりになっていた自分のおごりに気づかされ、悩み苦しんだことも一度や二度ではない。研修生として、設定された期限までに行わなければならないことと、学校生活との両立に苦しんだ時期もあった。しかし、劇場での研修が、単なるお仕事の体験ではなく、自分の内面についての思いを馳せるまでに、深いものとなったのは、ひとえにこの研修が長期にわたるものであったからにほかならないだろう。このような機会を与えて下さった、長期にわたってご指導くださった職員の皆さま、中山先生、一緒に過ごした研修生のみんなに感謝したいと思う。

（ふくもとゆみ／明治学院大学四年在学中）

つないでいくもの

岩瀬　恵美

今年度のあうるすぽっとインターン生は、前年度以前のインターン生の人数より約二倍の人数―六人で一チームだ。以前のインターン生は三人あるいは四人体制で、男性はいなかったが、今年度は女性四人、男性二人、年齢は全員二十代前半という、非常にフラットな集団である。あうるすぽっとインターン事業としては初の試みだと聞く大人数、男女入り交じった集団である今年度のインターン生たちの半年以上に及ぶ活動の様子を振り返り、今体制のメリット・デメリットを考えてみた。

まず、メリットである。六人いることにより、それぞれの担う重責が六等分され、三人体制であった頃よりも伸び伸びとインターンを楽しんでいたのではないかと思う。また、六人いることで、ある程度お互いの予定を尊重し合ってシフトを組むことができる点。これにより、インターン生が誰一人来られない日ができてしまうことをより軽減できているのではないかと考える。

次に、デメリット。これは具体例を挙げて述べたい。これは複合的な原因から起こってしまった事態だと考えているのだが、ある時期、研修中に六人全員が「今、どの企画が、どれだけ進んでいて、自分は何をすべきか」を明確に把握できていないことがあった。つまり、「インターン生一人一人が、今現在、何の企画の、何の作業をしているのか」ということを、全員が把握できない状況に陥ったのである。これは、メリットとしてあげた重責の分散の、裏面に隠れたデメリットとも言える。例えば、三人体制であったならば、一人一人に付加される仕事量は増えるが、その代わりお互いが今何に取りかかっているのか、ひいては自分は何をすべきかを確認しやすい。だが分散したことで、引き継ぎ作業をきっちりと行わないと、作業が重複したり、誰かがしているだろうからとそのままにしてしまうなどの弊害が発生する。

だが、これを改善することは簡単である。引継作業を行えばよいだけのことだ。が、しかし、この問題が発生した際、インターン生が全く連絡を取り合っていなかったのかと問われれば、それは否、である。では連絡をしていたにも関わらず、こういったアクシデントが起こったのはなぜか。

インターン当初、その日に行った作業は一冊のノートに書き記していた。だが、前年度の引継ノートを継承して見てみると、同時進行している企画の作業工程が雑然とかかれていることに気づき、「これでは翌年度のインターン生が企画それぞれの作業の流れを把握しづらいので、企画ごとに作業記録をわけよう」ということになった。それから、企画ごとにブログや専用ノートなど媒体を変えて記録を行っていたが、後半戦になるとそれが次第に粗野になり、最終的にメールでの引継ぎに終始してしまっていた。

メールはいつでもどこでも連絡交換が可能である。が、様々な情報に埋もれ、流れてしまう危険性も孕んでいる。そのことに気づいて以降は、またノートに書き記しての引き継ぎ方法に戻した。その方が時間は拘束されるが、活字を読み込むことで情報をしっかりと押さえることができるからである。このような私たちの起こした以上のアクシデントを参考に、翌年度のインターン生には是非より効率のよい確実な連絡体制を考案して頂きたい。私たちは、前年度の軌跡を参考に、自分たちなりの引継方法を考えたつもりだ。これが翌年度のインターン生の布石となればと願う。

（いわせめぐみ／早稲田大学卒）

劇場と舞台芸術との交流の日々

嶋田　敬介

いま私は、先ほどまで参加していた『渋さ知らズ』のワークショップのその興奮の冷めやまぬなか、劇場での九か月間を振り返っています。ワークショップでは私は法被に褌姿で踊り狂うことができました。そこでただただ解放された私の気持ちとその表出は、格段目を引くものでもなかったでしょうし、興行的、芸術的な価値もほとんどなかったでしょう。でもそれは、研修の講義で扱われてきた「(公共) 劇場はどうあるべきか？」というテーマに、部分的にも、答えるものに違いない
と考えます。劇場の舞台裏見学に参加する親子の姿からも、子どもたちがアーティストからパントマイムを学び劇場の舞台を踏む表情からも、新たに創作された盆踊りの輪に地域の方々が加わってくる様子からも、同様に劇場という場所から発信されるさまざま将来への可能性が感じられました。このように、表現や発見、可能性、人と人の縁の場所が劇場であるなら、劇場はその本来の意味範疇に集約することのできない本当に楽しい場所だと思います。

私は昨年、就職活動の最中にこの研修プログラムに応募しました。当時私は自分の「自由な」人生はあと一年足らずだと決め込んでただ焦っていました。就職も趣味も遊びも勉強も将来への展望も一度に全部を欲しがりました。そんな状況にある私でありながら、私に（多少なりとも）期待し迎えてくれた劇場のみなさんをはじめ、同期の研修生に感謝しています。今振り返ると、この研修に参加させてもらい、私は本当に色々な場所に行くことができ、舞台芸術各分野のプロ、ワークショップの参加者、色々な人とお会いする機会を与えてもらいました。自分が社会人としてだけではなく、ひとりの人間としても未熟であるということを感じることができたということも研修での大切な成果だったと思います。自分で気づいてない成果もまだきっとたくさんあるでしょう。
舞台芸術を間近に触れることのできた日々と、私が研修で出会った人たちと、自分の人生と、自分がやりたいことと、自分に向いていることと･･･。これらをどのように整理していけばよいか未だに自分はよく分かりません。しかし、（そんな自分に対する戒めの気持ちもこめて）一度、駆け抜けるようだったこの時間を胸のうちで熟成させたいと思っています。ただの思い出にはなりえないエネルギーが生成されるに違いない、そう信じています。

（しまだけいすけ／東京外国語大学四年在学中）

「実感」と「俯瞰」の行き来

岡島　裕紀

あうるすぽっとの研修生は、大変に恵まれた権利を与えられている。小さな事務所のなかで九カ月という長期にわたり自分たちの座席を与えられ、そこにいつでも座っていて良い、という権利である。理解し行動を起こすべき情報、不要な情報、たまたま知ってしまった情報…包み隠されることなくあらゆる情報が飛び交う現場に身を置き、関わり続けることで、私たちは着実にあうるすぽっとの平成二十二年度を日常として強烈に「実感」してきた。その感覚は、短期間で知識やノウハウを得る「学習」や、学習すべきことを効率的に網羅するため設計された「教育」とは根本的に異なるものである。

しかし、アートマネジメントを学ぶ私たちが公共劇場への理解を深めるためには、自分たちの日常としてのあうるすぽっとを「俯瞰」する視点が必要となる。属する財団内での役割、管理を委託する豊島区との関係、利用者や観客の評価、マスメディアからの注目のされ方など、断片的なステークホルダーの情報を自分なりに解釈していくことで、おぼろげながらも日常関わる事業が何のために存在し、何が求められているのかを客観視することができてくる。また、あうるすぽっとを俯瞰するためには他の劇場と比較するということも効果的な手法だが、そのためには同様に「日本の劇場を俯瞰する視点」の必要性が生じる。研修生にとって難しいこの分野について補完する形となるのが、中山夏織先生の講義である。文化行政の根本を問う講義、日本とは大きく異なる海外の最新の劇場システムについての講義などは、自分が今劇場法（仮称）に高い関心を抱くようになったきっかけとして、非常に印象的なものであった。また中山先生自身の現在のあうるすぽっとに対するコメントも、立ち上げ時から現在まで続く深い関係が反映されたものであり、私にとっては非常に貴重なアドバイスであった。

この「実感」と「俯瞰」の二本柱は、研修生にとって大きな相乗効果をもたらしている。俯瞰する視点を養うには、公共劇場の年間活動を日々実感し、一つの基準として自分のものにすることが大きな助けとなる。また俯瞰する視点が少し理解できるだけで、日々のあうるすぽっとでの出来事が、その面白さをぐんと増してくる。

最近、私は「こんなに恵まれた環境で研修できるのは、もしかして、あうるすぽっとが特別なんじゃなかろうか」と、その少し覚えたばかりの俯瞰する視点で思うのだ。

（おかじまひろき／埼玉大学四年在学中）

体験しなければわからなかったこと

寺村　千絵

「日本では、【演劇】が職業として成り立ちづらい」「自分が大好きな演劇をもっと多くの人に好きになってもらいたい」「日本の舞台芸術の発展を望むなら、鑑賞者を増やすことが必要だ」、この思いから、演劇作品と人々の間に立つアートマネジメントという仕事に興味を抱き、妙な使命感からあうるすぽっとのアートマネジメント研修に応募をした。

九か月に及ぶ研修は、毎日が学ぶこと、感動することに溢れており、大学生活の締めくくりにふさわしい濃度の濃い日々を過ごすことができたように思う。元々、小劇場での制作手伝いなどの経験があったので、自分が演劇制作というものには多少知識があると思っていたが、それは思い込みだった。ワークショップ運営や公演制作補助で私たちが行った仕事のほとんどは、書類作成やデータ整理であり、【アート】より【事務仕事】の色が濃かった。これは、舞台制作の職業にこだわりながら就職活動をしていた自分にとって、とても重要なことを教えてくれたように思う。

【舞台制作は特殊な仕事】というイメージを抱いていたが、実際必要とされる仕事のスキルは一般の企業で必要とされるものとほとんど変わらなく、それが舞台芸術を事業として成り立たせる上で大変重要な役割を持つということを知った。これにより、結果として自分が大学を卒業してはじめに就く職業の選択の幅が広がった。今は、社会人としての常識や基本的なスキルを身につけてから、舞台制作の道に進んでも遅くはないと考えている。加えて、広報活動のために豊島区内の掲示板百か所以上にポスターを貼ったり、チラシを三千枚折込みに行ったりする中で、「演劇が好き」という気持ちだけでは続けられない厳しい仕事だというのも身をもって体感することができた。

また、教育普及事業の一環のワークショップでは、舞台芸術を通して生まれた人々の交流や、大人たちの生き生きとした笑顔、子供たちの豊かな発想力に出会うことができ、【鑑賞のため】以外の舞台芸術の価値を確認する機会となった。私自身多くのワークショップ参加者との交流を通して、更に舞台芸術が好きになり、同時に沢山の人間の魅力に気づかされた。

今回の研修は、【自分、他人、舞台芸術の関わり方】について深く考える期間であった。将来、自分は舞台芸術を通して何をしたいのか。具体的な計画と必要な事柄を揃えながら、小さくも確実な歩みをしてゆこうと思う。

（てらむらちえ／明治大学四年在学中）